

松井 修, 角谷眞澄, 他 (編著)

# 肝の画像診断 画像の成り立ちと病理・病態 第2版

森 宣

大分大学名誉教授

待ちに待った、松井修先生が率いられる金沢大・松井グループの新著である。豪華で優秀な編著者・共同執筆者の面々を見るだけで期待が高まるが、ページをめくると数ある医学書の中でこれぞ「本物」という醍醐味を味わえることは間違いない。簡潔な語り口と美しい画像に病理像と概念図が完備されているので、肝臓専門の研究者にも初心者にも扉が開かれる好著である。ただし、読者にはじっくりと腰を据えて読んでほしい。本書は総論と各論に分かれているが、全体を通して読むと、肝臓の病理・病態を画像がどう表しているか、同一疾患でも病理・病態は多彩であることを理解するのに絶好の書である。かつ臨床の場での座右の書としても重宝されるのは間違いない。

肝画像診断に大きな変革をもたら

した Gd-EOB-DTPA 造影 MRI の原理というべきトランスポーターを理解できるのも嬉しい。詳述されているのにわかりやすいのは、的確な画像―病理像そして美しい概念図のおかげである。24 年ぶりに改訂された第2版であるが、CT, MRI を中心とした画像診断に病理学・分子病理学の知識も入っており、次の24年間と言わず永久保存版としてお持ちになることを薦めたい。

近年、静脈血からの癌 DNA 情報 (liquid biopsy) が注目され、人工知能 (AI) の進歩も相まって、人間による画像診断・病理診断は岐路に立たされている、という論調の議論が多いように思われる。しかし、本書をじっくり読むと人体で最大の実質臓器である肝臓の一つの疾患でも病理・病態そして画像がいかに多彩であるか理解するであろう。そし

て、やはりまだまだ人間が学ばねばならない領域が広いことに気付くであろう。

序に書かれた「本書における多くの知見は、数多くの患者さんの辛い体験のもとに成り立っています。医師としての心痛む思い出が本書を上梓する大きな原動力となっています」という松井先生の心からのお言葉は、必ず読者の心を打つはずである。AI や liquid biopsy が一般的になる時代が到来しても、いつの時代でも医師が忘れてはならないのは “patient first” であることも教えていただいた貴重な書である。

●B5/頁 336/2019 年

定価：本体 9,000 円＋税

[ISBN978-4-260-03204-9]

医学書院 刊